

第4分科会テーマ

誰もが共に成長し認めあえる地域社会の実現〔障がい者の生涯学習・共生社会〕

「みんなちがってみんないい」

～障がいを持つ人も持たない人も共に活動、いきいきライフ～

NPO法人指定障がい福祉サービス事業所「すぎのこハウス」

所長 佐藤 明美

1. はじめに

平成13年春、山形県立新庄養護学校の保護者、教職員の有志で、小規模作業所すぎのこハウスを設立し、法律の改正に伴い平成19年4月より、障がい福祉サービス事業所すぎのこハウスと名称を改め、県の指定を受けて現在に至る。

新庄養護学校でお世話になった音楽の先生が退職されたのを機に、15年より「すぎのこバンド」を結成し、週1回の音楽クラブの活動を行ってきた。また、余暇活動のひとつとして、スペシャルオリンピックス日本・山形新庄支部に所属し、ボウリングや卓球、バドミントン等のスポーツを楽しむ機会を得た。さらに、読み聞かせのボランティアの方が来所して下さったのをきっかけに「すぎのこ一座」を立ち上げた。

2. 具体的な取り組み

「すぎのこバンド」は、12月の障がい者週間記念イベント「一歩²フェスタ」にて、新庄 駅併設のゆめりあでの演奏を毎年行ってきた。

依頼があった時には、様々な場所に出向いて演奏をしてきて、市民プラザで行われた新庄市健康福祉祭りでのアトラクション、教育の日のステージ発表、新庄文化会館で行われた知的障がい者福祉大会、ゆめりあでの「かもしかクラブお楽しみ会」、山形市で行われた文翔館前ステージでの「とっておきの音楽祭」、ビックウィングでの芸術祭、天童ホテルで行われた「福祉研修会東北大会山形大会」、金山町のシェーネスハイムで行われた県内の福祉職員研修会、川西町にあるコロニー希望が丘の文化祭、新庄養護学校交流学习、村山特別支援学校楯岡校の交流学习等々である。

「すぎのこハウス」を訪ねてくれるお客様も多くおり、夏祭りでの地域の方々、県立新庄北高校の進路学習、金山高校との交流学习の高校生や、山形子どもと授業を楽しむ会の北海道や関西の小中学校の先生方に演奏を聴いてもらった。

スポーツを楽しむ活動では、毎週第1・3日曜日に卓球とバドミントンを新庄市にあるわくわく新庄の体育館で行っている。

また、読み聞かせを聴いているうちに、自分達も物語を演じてみたいという気持ちが芽生え、近くにある老人ホームや社会福祉協議会主催認知症カフェでの読み聞かせの活動に取り組んできた。

3. 活動等の成果

- ・「すぎのこバンド」は週に1回の練習と、年に数回の発表の場をすることにより、社会参加の機会を得たと感じている。歌が好きな人が多いので、週に1回は音楽活動することにより、充実した時間を過ごし、人前での発表は、自己実現の場となったようである。また、絶対音感がある人のピアノの演奏を聴いてくれた高校生は、「天才ピアニストだね」と感激していた。
- ・子育て中の「かもしかクラブ」のお母さん達は、障がいがありながらもステージに立って、いきいきと自分を表現している姿に出会い、「自分がやっている子育てを見直すきっかけになった。」「涙が止まらない。」と言ってくれた。
- ・休日は何をしたらよいか分からなかった人がスポーツ活動に参加して、余暇活動の充実を図ることが出来るようになった。
- ・わくわく新庄を会場にしてからは、市民ボランティアの方々の参加が非常に増えて、高校生から退職された教員まで、幅広い年代の方々にサポートしてもらっている。部活が続けられない高校生や、定年退職後の運動不足の解消、体力増進のために参加する人など、人のためだけではなく、自分のために活動する姿は、まさに生涯学習の実践そのものだと思う。
- ・自分達が感動した話をたくさんの人々に伝えたいという気持ちで「すぎのこ一座」の活動に取り組むことにより、高齢者の優しい視線や拍手をもらい、自分達がアクションを起こすことで、会場全体があたたかい雰囲気になるということを実感し、まさに生きている喜びを味わうことが出来た。

4. 今後の課題

コロナ禍の今は、リモートによる活動によって、情報を受けることができて、自分たちで発信することは難しい。様々な要因は考えられるが、人と人との触れ合いの場と、心と心がつながる瞬間を感じとらなければ、自分が活躍出来る場を作り出すことができないからだと思う。それならば今の自粛は、充電期間と捉えて、次なる機会までいろんな構想を練って、ステップアップすればいいのではないかと思う。

最後に、障がいを持つ人が生涯学習を続けていくためには、それを支援する人が不可欠である。障がいを持つ人も持たない人も共に楽しく活動できる社会の実現を目指していくことが、全ての人の幸せにつながるものだと願ってやまない。